

ルネサンスⅡイタリアにおける宗教改革

——広い意味における宗教改革の見方から——

佐藤 堅 司

目次

- 一 宗教改革の意義
- 二 ローマⅡカトリク教の実情
- 三 イタリアにおけるカトリク改革
- 四 サヴォナローラのカトリク改革
- 五 反宗教改革と再宗教改革

一 宗教改革の意義

宗教改革といえ、ルター中心の、もしくはツウイングリヤカルヴィンの、宗教改革のみを考えるのが普通だが、この見方は狭い。そこでハルムは、この意味における宗教改革を「プロテスタント宗教改革」とし、これに対するカトリク側の反宗教改革を「カトリク宗教改革」として、宗教改革を広く義に考えている。「ハルム著『ルネサンスと宗教改革』参照」私はこの見方に賛成する。

しかし、宗教改革の意義は、さらに拡大される。プロテスタント宗教改革に反抗してあらわれた再洗礼教や、統一教や、清教等における再宗教改革も、カトリク宗教改革の後に起ったジャンセン教も、宗教改革でなければならぬ。そればかりではない。カトリク宗教改革というのは、単に反宗教改革やそれに対する再改革を意味する以外に、それよりも遙かに以前、すなわちルターらの宗教改革以前に、イタリア人サヴォナローラによって企てられたもの（後に詳述）のなかに見出されるからである。

宗教改革の意義は、以上のように、きわめて広汎である。しかし、われわれはそれだけの解釈で満足してはならない。われわれは思いきって原始キリスト教の発現当時にさかのぼり、キリスト教そのものが、ユダヤ教に対する宗教改革であったことを注意しなければならない。

それなら、キリスト教が宗教改革において果たした役割は、

いったいなんであつたか。そこには二つの特色がみとめられる。その第一は、キリスト教が、ユダヤ教の国家主義的偏愛をあらためて、世界主義的博愛としたこと、その第二は、ユダヤ教の律法的束縛をはなれて、自由を獲得したことである。そうして、第二に関する証拠は、『新約聖書』におけるつぎの言葉のなかに見出される。

律法に由りて義とせられんと思ふ汝らは、キリストより離れたり。(『ガラテヤ書』)

キリストは自由を得させん為に我らを置き放ちたまえり。(同上)

そこに原始キリスト教の本質、すなわちユダヤ教に反抗して敢行した宗教改革の意義が存するのである。

ルターらの宗教改革は、上述原始キリスト教の再生であつたという意味において、私はこれをルネサンスと考へる。ルネサンスといへば、ギリシヤ、ローマの古典文化(主として学問・文学・美術)の再生を意味するのが普通であるけれども、私はそれをもっと広い意味に解釈して、原始キリスト教の再生である宗教改革をもルネサンスとしたいと思う。そこで私は「ルネサンスと宗教改革」(Renaissance and Reformation)として両者を区別する通説に反対して、学問・文学・美術のルネサンスに対して、宗教のルネサンスを主張し、一つのルネサンスの名目のなかに、広義における全面的なルネ

サンスをみとめるものである。

私は宗教改革の意味を以上のように広義に解釈したのち、ルネサンスⅡイタリアの宗教改革について一考察を試みようと思う。

二 ローマⅡカトリク教の実情

ローマⅡカトリク教の中世化は、キリスト教を、その原始の姿から、すなわち『聖書』における本来の姿から、次第に隔絶した。その第一は、政治化である。それは「神のものは神に与えよ、皇帝のものは皇帝に与えよ。」と警しめた『聖書』に対する反逆である。

カトリク教政治化の揺籃は、聖アウグスティヌス(三五四〜四三〇)の『神国論』に見出される。本書では、まず神の国(善神の世界)と地の国(悪魔の世界)を天地両界に求め、つづいてこの二元世界を地上に移したのち、二者の対立は神の最後審判によって決定され、地上は純一な神の国になるであろうという特殊な神政史観を立てた。アウグスティヌスは「神の国は近づけり。」という福音の意義を拡充したのであつて、『聖書』を裏ぎったわけではない。然るにローマ法王は、後に述べるように、アウグスティヌスの意図に反して、俗界に墮し、帝王と政権を争うにいたつた。

第二は神人の媒介者として僧侶をみとめたこと、第三は聖

母・使徒・殉教者を偶像として信仰する一種の多神教に退化したこと、第四はローマ法王とその無過失を承認したこと、第五は七聖礼をみとめたこと、第六は僧官売買が許されたこと、第七は免罪符の発売がみとめられたこと、第八は迷信が強制されたこと、第九は戒律を守らなかつたこと、等々。——ローマ・カトリク教は、以上のように原始キリスト教に違背する行為を敢てした。

以上のような、ローマ・カトリク教中世化の根元をなしたものは、大長老グレゴリー一世（五〇九～六〇四）（大法王と諡された）である。グレゴリー一世によって、ローマ法王の政治的意欲の基礎はつくられた。また彼は聖母や使徒の像を使用し、偶像崇拜を強制し、無形の神を有形化し、一神教を多神教化することによって、信者の数を増そうとした。「無智は信仰の母」を標語とした彼は、迷信をもつて信仰の極致とし、そのために、パラティノ図書館を焼却したり、古典や数学の研究を禁じたりした。迷信持続のために、信者を愚にすることを要件としたからである。

歴代のローマ法王は、大体において、グレゴリー一世の政策の踏襲者であった。法王のなかでまず頭角をあらわしたのはグレゴリー七世（一〇七三～八五）であつて、この時神の王国と地上の王国との二大中心をローマ教会に兼摂しようとする意識が濃厚になつた。しかし、修道僧出身であつたこの法

王は、教会の伝統政策に反して、教会肅正問題に大童となり、僧侶の独身と売官とを禁ずる二令を宣告した。（一〇七四）これは後に述べるパウロ三世の反宗教改革に対する先例として、注目に値する。

しかし、ローマ教会や修道院は、主としてカトリク中世化の一途をたどるのみであつた。それらに関して、ブルクハルトの名著『イタリアにおけるルネサンスの文化』の第六篇は、詳細な記載をしている。同篇第二章「日常生活における宗教」第三章「宗教とルネサンスの精神」第四章「古代的迷信と近代的迷信との錯綜」第五章「一般信仰の動揺」を参照するがよい。

それらの諸章から、カトリク教中世化の具体的な事例をあげれば、つぎのとおりである。（一）虚偽の奇蹟（二）遺物崇拜（三）聖母崇拜（四）占星術（五）各種の迷信——それらのうち、特に第一例について述べることにする。

ブルクハルトは、虚偽の奇蹟に関する問題を、僧侶の素行の点から考え、けつきよく、これを修道僧の行為にしぼっている。素行上に責めらるべきものは、僧侶階級全体であり、教会僧侶も修道僧も同様であつたが、修道僧は教会僧侶の墮落を憤慨して、戒律を守り、純潔と貧困と服従とを標語としていただけに、その墮落は特に問題とされたわけである。ブルクハルトはこれに対して、「修道僧は全僧侶階級にかわつ

てその罪を一身にひきうけた。」といているが、まことにそのとおりである。

かくしてブルクハルトは、ナポリに起った実話として、虚偽の奇蹟によって愚民をまどわした、憎むべき修道僧の悪行をつぎのように指摘している。『イタリアにおけるルネサンスの文化』第六篇』

フランチェスコ派の修道僧は、欺き、盗み、姦淫し、そうした悪事のつきた時には、その或るものは聖ヴィンセントの法衣を、或るものは聖ベルナルドの書を、また或るものはカピストラノの驢馬の手綱を展覧しながら、聖者を装うて奇蹟を行った。その時他の或るものは、「相棒」(Helfershelfer)となつて、盲人や瀕死の病人をよそおい、彼らの僧衣の縁や、あるいは彼らの携えた聖者の遺物に触れるや否や、忽然として回復したような形を示した。

また時としては、説教壇上の修道僧が聴衆のなかにまじっていた一味の修道僧から嘘つきだと罵倒される場面もあるが、そう言ったものはすぐさま懲られたような状態におちいる。そうすると、説教者はその者に悔悟を誓わせてなおしてやる。

以上の虚偽の奇蹟とその結果とについて、ブルクハルトはつぎのように記している。「すべてが道化芝居である。この修道僧はその相棒と共に多額の金をあつめ、これによって枢機官から司教職を買い、安楽に天命を全うした。」純潔そのもの

ルネサンスイタリアにおける宗教改革(佐藤)

のであった聖フランチェスコの道統のなかに、前記のような破戒の悪憎をみたのは、まことに歎かわしい次第である。(ドミニコ派の修道僧についても、同様のことがいわれる。)

つぎにわれわれは転じて、ボツカチヨの『デカメロン』(十日物語)に眼を移すことにしよう。ボツカチヨは無信仰者といわれるが、キリスト教そのものの価値をみとめていた。『デカメロン』の初日第三話には、キリスト教・ユダヤ教・マホメット教は、三つの指輪(『古譚百種』のうちにも見出される)のように、その優劣は辨別さるべくもないと語られているが、同日第二話のうちには、三教中最も優れたものはキリスト教だと述べられている。その理由はこうである。

ローマ法王庁には、神聖のかわりに淫慾、敬虔のかわりに貪婪と欺瞞があった。それにもかかわらず、キリスト教が絶えず発展し、光輝を増してゆくのは、他のあらゆる宗教よりも、真実であり、神聖であるからである。

ボツカチヨは、無神論者といわれながらも、理神論者のようにキリスト教を否定することはなかった。僧侶の悪徳によって害することのできないキリスト教のよさをみとめていたのである。僧侶の悪業は、『デカメロン』百話の随処にあばかれていた。同書三日目第四話のなかには、若い博識な学僧が、熱心な信者に天国へ行くための苦行を続けさせているうちに、その妻に戯れたことが記されている。

三日目第八話には、或る破戒の悪僧が、檀家の妻女に挑んだとき、つぎのような聞きすてならない台詞をつかっている。

僧侶の権威は、霊にあって、肉にあるのではない。愚僧の求めるものが、その霊と交渉のないものである以上、その要求のために、愚僧の尊厳が落ちるはずはない。

こうした憎むべき詭弁を用いた悪僧は、無智な亭主をあざむき、その妻女に子を産ましめ、これを聖ベネディクトの御恵みの結果と信じさせたのである。

七日目第三話には、或る若い僧侶が、さる資産家の夫人に恋を仕掛けて、「坊さんの世界にも恋はあるものですか。」と詰問されたとき、「そうです、奥さん、坊主だって衣を脱げば、ただの人間にすぎません。」と答えたことが記されている。

ポッカチヨは、さらに尼僧たちの裏面生活をあばいている。三日目第一話は、尼僧らがそろいもそろって園丁に戯むれたという聞くにたえない話であるが、作者はわざと語手をしてつぎのような言葉でそうした行為を弁護せしめている。

世間には融通のきかない人が、ずいぶんあるものだ。年頃の婦人が墨染の衣に着換えたら最後、もう女ではなくなり、情慾は消え失せ、木石のようになってしまうと信じているものが、決して少くない。もしも尼さんが彼らのそうした考に反した行為をするなら、それをきわめて不自然な不合理な罪だとして責め立てるのだから、まったくやりきれない。

ところが、悪徳の行われたのは、僧尼の側ばかりではなく、信者の側にもあった。信徒でありながら、僧侶をあざむいたり、キリスト教の伝統を狡猾に利用した場合がある。三日目第三話には、フロレンスの或る婦人が、無智で慾ふかな僧侶を利用して、情事の取りもちをさせた話が出ている。この婦人の行為は、「フロレンスはもともと譎詐と奸計とにみだされた町である。」という意味で許されているのだから、驚かざるを得ない。

初日第一話には、信者の仮面をかぶった悪漢が、おのれの犯した罪を隠し、高僧をあざむいて偽わりの懺悔をなし、死後聖徒と崇められたという話、二日目第一話には、さる道化役者が疋りを装い、聖徒アリゴの屍体に触れて、足腰の立った風をすると、それをみていた僧侶も群衆も、聖徒の示した奇蹟と信じたという話が載せられている。

要するに、ポッカチヨは、キリスト教僧侶と信者との関係を、「誤魔化したり誤魔化されたりする関係」もしくは「誤魔化されたり誤魔化したりする関係」とみていたのである。

三 イタリアにおけるカトリク改革

上述のような、カトリク教の実情を熟視するものは、その常識上、イタリアこそ宗教改革（プロテスタント改革）が、まず起るべき場所であったと考えるであろう。しかし、事実

はそうでなかった。ブルクハルトは『イタリアにおけるルネサンスの文化』第六篇のなかに、その理由について、つぎのような検討を試みている。

なぜイタリアは、ドイツのそれに類する宗教改革を、ドイツに先んじて起さなかったのであるか。——この疑問に対して、一応もつともらしい答がある。「イタリア人の感情は、けっきょく教会組織の否定以外に出なかった。これに反して、ドイツの宗教改革は、積極的な内容をもつ教説、特に信仰によって義とされ、善行を無価値とする説（〔註〕以上の二つは、信仰そのものを本拠とし、免罪符を否定する説である）に由来するのである。」……

イタリア人の意向は教会組織の否定のみであったのに対して、ドイツ人のそれは信仰そのものを本拠としたという以上の答を駁して、ブルクハルトはつぎのような異説を掲げている。

イタリアの宗教運動は、それよりも早く行われた。そうして第十三世紀の神秘哲学者からサヴォナローラ（〔註〕第十五世紀後半の人、後述）にいたる間において、ドイツのそれよりも遙かに積極的な信仰心が見出された。然るにそれが遂に成熟をみるにいたらなかったのは、幸運にめぐりあわなかったためである。

ブルクハルトのいったように、サヴォナローラにいたるまでの二三世紀間、イタリアにははたしてそのように活潑な宗

ルネサンスイタリアにおける宗教改革（佐藤）

教運動が展開されていたかどうか。私はブルクハルトの見方に誇張がありはしないかと思うのであるが、とにかくこの線に沿うて、その実否をたしかめることにしよう。

われわれはまず第十三世紀におけるイタリアのキリスト教廓清運動に眼を注ぐことにしよう。そこには修道院が見出した最も偉大な清僧、アッシジうまれの聖フランチェスコ（一八二—一二二六）がいた。フランチェスコのローマ教会に対する態度は、南フランスのワルデンス派もしくはアルピジョア派のように反抗的ではなく、協力的であった。それはこの聖僧の人格のあらわれであって、法王インノセント三世の絶讃をうけたのは当然である。（拙著『西洋文化史講話』第二十二章参照）

フランチェスコの人格の結晶であったフランチェスコ教団は、純潔（童貞）・貧困・服従の三綱領を堅持し、身を守ることは厳格であったが、他に対してはきわめて寛大であった。福音主義に徹底すると同時に、博愛の宗教としての本来のキリスト教を復活することにつとめた。フランチェスコには、折伏の考がなかった。イスラム教の武力征服や十字軍の侵略主義は、全然念頭になく、キリスト教を平和に伝道するために、みずからエジプトに赴き、イスラム教徒の手を握ったほどである。だから、その純潔・貧困の厳守は、ローマ教会への反抗もしくは面あてとなることなく、かえって教会の欠

点を補う擁護運動となったのである。

ブルクハルトはフランチェスコについて語るところがない。しかし、われわれはブルクハルトが問題とした第十三世紀の、しかもその初期において、フランチェスコのきわめて謙讓な、ほとんど無意識とさえ思われる程度の宗教改革運動をみとめざるを得ない。なんとすれば、フランチェスコの歩んだ道は、ローマ教会の歩んだ政治化・戦争化・非博愛化・非戒律化とは異なるものであったからである。フランチェスコには、ルターらにみたようなプロテスタント改革の意欲はなかった。しかし、そこには反宗教改革としてのカトリク改革以上の、むしろプロテスタント改革と共通するなにかが潜在していた。

フランチェスコの時代は、十字軍の凋落時代であり、法王権の衰運時代であった。その後この衰運を挽回しようとしてあらわれたのが、ドミニコ派の修道僧、アキノうまれのスコラ哲学者トーマス・アキナス（一二二七～七四）である。トーマスは、フランチェスコとはちがった立場において、ローマ教会を擁護しようとした。彼の大著『神学綱要』は、哲学を神学の臣従としたスコラ哲学の記念碑であるが、法王を皇帝の上に、教会を国家の上に、信仰を理性の上に置き、前者によって後者を支配し、これによって法王権やローマ教会の勢力を回復しようとしたものである。

トーマス・アキナスの学説は、ローマ法王や教会の中世的過失になんら触れるところがなく、その絶対性を主張したところの、あまりにも独善的な決定論におちいった嫌いがある。そこでフランチェスコ派の修道僧のなかから、トーマスの学説を反駁するスコラ哲学者があらわれた。その人はイギリスのズンス・スコーツス（一二七四～一三〇八）である。

彼はトーマスとは異なる立場にたつて、神学と哲学とを區別し、信仰と理性とを分離して、前者は主として実地的なものを、後者は主として理論的なものを取り扱うべきであると主張した。神学を従前のそれ（スコラ哲学）よりも狭く深く徹底せしめることによって、神学の新たな使命を見出し、新時代に適應せしめようとしたものであるが、そのために、スコラ哲学の圏外に脱出したかの観がある。

ズンス・スコーツスは、「神学は信仰を本拠とし、信仰は思索によることなく、それよりも実地的な、意力の働きによるものである。」と考えていた。信仰そのものを本拠とするスコーツスの神学は、当然『聖書』の研究に集中した。そうして、それが揺籃となって、ウイクリフ（一三二〇～一八四）を促がして、『聖書真相論』を執筆せしめ、『新約聖書』を英訳せしめ、ローマ法王や教会の世俗化を否定せしめる動機を醸成するにいたつたのである。

再びイタリアに帰る。われわれはそこにスコーツスと同時

代のダンテ（一二六五～一三二一）を見出す。トーマス・アクィナスの信奉者と称されるこの文豪の宗教思想を『神曲』のなかに一瞥する。「史観所載拙稿『神曲』におけるダンテの自力性と他力性」参照）ダンテはカトリク教の熱心な信者であり、法王と教会とに対して敬意を寄せていた。しかし、法王と教会とに対する信頼が、無条件においてでなかったことは、『神曲』の通読によって知られる。同書地獄篇において、貪慾無類の法王ポニファキウス八世（一二九四～一三〇三）を槍玉にあげ、煉獄篇において法王ハドリヤヌス五世（一二七六）の貪慾の罪の告白を聞く場面がある。それとおなじ罪によって、アヴィニオン法王クレメンヌ五世（一二三〇～一三〇五）も、攻撃の矢を免れなかった。ダンテはこのように法王の悪徳を攻撃したばかりでなく、法王によって承認された免罪符や僧職売買や偶像崇拜をも否定した。

ダンテは後にあらわれるプロテスタントのように、神人間の媒介を否定することがなかった。『神曲』における彼の三界遍歴にあたって、ダンテが最も頼りとした媒介は、ヴァージルであり、ベヤトリーチェであり、聖ベルナルドであり、聖母マリヤであった。この意味において、ダンテはプロテスタント改革者とみられるよりも、カトリク改革の希望者であったとみられるのが至当であろう。

四 サヴォナローラのカトリク改革

ダンテの時代（一二六五～一三二一）は、十字軍の終焉（一二七二）を含み、ローマ法王に関しては、クレメンヌ四世（ベネディクト十一世の時代（一二六五～一三〇四）の全部を包み、クレメンヌ五世とグレゴリー十一世のアヴィニオン法王時代（一二三〇～一三〇五）にまたがっていた。そうして、この時代は、法王権が地に落ち、法王の悪徳が目だってきた時代であったから、前述したように、ダンテが『神曲』のなかにそうした法王を指弾したのは、当然といわなければならぬ。

しかし、ダンテはそのために、ローマ法王やローマ教会以外の別箇のものを考えていたのではなかった。彼の意中には、プロテスタント改革はなかった。彼の意図したものは、正常なローマ法王とローマ教会とであり、アヴィニオン法王の出現以後においては、こうした変則状態と異なる正統的なローマ法王の復活を希望していた。

ダンテ以後の文豪ペトラルカ（一二三〇～一三〇四）は、フロレンスを故郷としながら、八歳以後南フランスのアヴィニオンを第二の故郷としたにもかかわらず、「わがイタリア（Italia）」といって祖国愛に燃え、ダンテとおなじように、ローマ法王の復活を熱望していた。

ペトラルカの死後四年、ローマ法王は、ウルバン六世（一

三七八（八九）によって復活した。しかし、アヴィニヨン法王は、クレメンス七世（一三七八（九四））により存続されて、ローマ法王と対立し、一四〇九年ピサ宗教会議の結果、アレクサンドル五世（一四〇九（一〇））がピサ法王に選立されてから、三法王鼎立の分裂時代となって、法王権は衰頹の一路をたどるのみとなった。コンスタンス宗教会議（一四一五（一八））によって三法王が廃され、マルティン五世（一四一七（三一））がローマ法王に選ばれて、法王権は再び一人の手に帰することになったが、宿弊はなんら改善されることがなかった。

然るにこの宿弊の救済者としてあらわれたドミニコ派の修道僧がある。フェラーラうまれのジローラモ・サヴォナローラ（一四五二（九八））が、その人である。サヴォナローラは、フランチェスコ以後のイタリアに見出された唯一の清僧である。ルネサンスの放肆のために汚された、言語に絶する物心両界の濁悪〔西洋史研究所載拙稿『ルネサンスにおける人間性』参照〕は、この清僧の目には仇敵として映じた。彼は法王シクスツス四世（一四七一（八四））のはじめた甥政治（ネポティズム）（門閥政治）を唾棄し、法王アレクサンドル六世（一四九二（一五〇三））の荒淫と悪辣政治とを糺弾してやまなかった。

サヴォナローラは、マキャヴェリ（一四六九（一五二七））と同時代人でありながら、正反対の思想をもっていた。マキャヴェリは、『君主論』において、「時代精神」を強調した最初

の歴史家であるが、君主に対して「時代精神に即応して行動する見識」を要求し、「時代精神に棹さして行動する君主は栄えるが、これに反して、時勢に逆行する君主は衰える。」という見方から、賢明な君主は、食うか食われるかの戦国時代の意識において、自己の存立もしくは発展という目的を達成するためには、いかなる手段をも、すなわちいかなる不道徳をも、陰謀をも、暗殺をも辞すべきでない」と主張し、そうした君主の性格の理想的な持主として、法王アレクサンドル六世の子チェザーレ・ボルジャ（一四七六（一五〇七））を選んでいる。「史観所載拙稿『ルネサンス・イタリア外交の一断面』参照」ところが、サヴォナローラは、マキャヴェリのいう時代精神の逆を歩んでいた。

マキャヴェリに対して、目的を達するための手段としての悪徳は、時代精神の眼から道徳として承認されたものであったが、サヴォナローラにおいては、絶対にそうではなかった。そのため、彼はアレクサンドル六世の不徳と破廉恥とを攻撃してやまなかった。ルネサンスの擁護者であったメデイチ家も、学問・芸術の奨励者であったロレンツォ・デ・メディチも、その贅沢と放肆と不品行とのために、弾劾をまぬかれなかった。

サヴォナローラは、濁悪世界における白蓮華であった。その生活の純粹は、後にあらわれた清教徒クロンウェルに比較

される。彼の一念は神の前の純真な小羊となることであつた。彼の本願は、『聖書』への復帰によって、福音の精神に徹することであつた。(後にランケは『政治問答』に「キリスト教を知るためには、なにをおいても、福音書を読まなければならぬ。」といっているが、サヴォナローラの考え方と同様である。) 信仰そのものによって、「神の王国は近づけり。」という福音精神にしたがい、フロレーンスを「新しいイエルサレム」とするのが、彼の念願だつた。

サヴォナローラが勸悔説教師として人々に要求した純真な信仰というのは、まったく理窟を抜きにしたものであつた。それについてブルクハルトはサヴォナローラの説教をつぎのように引用している。『イタリアにおけるルネサンスの文化』第六篇参照)

プラトンやアリストテレスのなし得た唯一の功績は、異端折伏のための論法を多く残した点にある。しかし、彼らやその他の哲学者らは、地獄のなかに堕ちている。「ダンテの『神曲』地獄篇参照」

信仰について、老婆はプラトンよりも多く知っている。役にたちそうにみえる多くの書物がなくなつたなら、信仰のためには好都合であらう。

この「老婆の信仰」は、わが真宗における芬陀利華(白蓮華)の信仰、すなわち「妙好人の信仰」に類する。なんの理

ルネサンスイタリアにおける宗教改革(佐藤)

窟も論議もなく、神に頼りきつた姿である。ブルクハルトは、一般信者に対するサヴォナローラの本心をつかんでいたようである。

サン・マルコの修道院長となつたサヴォナローラは、その人格と弁舌との力でフロレーンス人を魅了した。メディチ家の主権下におけるフロレーンスの悪政治とその社会的不道德とを攻撃し、このまま悔い改めることがなければ、天譴がくだされるであらう、そうしてその天譴はフランス王チャールス八世によってなされるであらうと予言した。この予言は見事に適中して、一四九四年フランス王の侵入となり、ピエロ・デ・メディチは放逐された。

メディチ家失墜の結果、フロレーンスに新しい共和政治が設けられ、「カトリク教のピューリタン」であるサヴォナローラは、その指導者となつた。新共和国は神の王国であつた。それはキリスト教的共和国であつて、その統治者は神であり、その法律は福音書であつた。人民のすべてに対して、すなわち、富民に対しても、貧民に対しても、労働の福音が説かれた。普通の意味における政治家によって支配される国家以上の宗教国家が、サヴォナローラの意中にあつたのである。ブルクハルトは、サヴォナローラの書中から、その独善的意向をつぎのように指摘している。

学問は少数者の習得すべきものであつて、……他の多数者は文

法・作文・宗教のみの教育を必要とする。かくして、一切の教育は修道僧の手にゆだねられ、また国家を統治すべき「最高の知恵者であり聖者であるもの」も、修道僧に帰着するであろう。

サヴォナローラには、こうした一方的な、偏狭な、民主性を欠いた、精神的貴族主義者である一面があった。一老婆の信仰をプラトンやアリストテレス以上とした民主主義者のサヴォナローラの他の一面には、聖智の修道僧を理想の統治者とした点で、哲人政治を理想としたプラトンの貴族主義に一脈共通するものがあった。

カトリク教のピューリタンであったサヴォナローラには、プロテスタント教のピューリタンであったクロンウェルと共通するものがあった。清濁あわせ呑む雅量がなく、自己の純真性をあくまで他に強制した厳格さにおいて、両者ともに符節をあわせているからである。

サヴォナローラの厳格政治は、一四九七年の謝肉祭における焚火の刑に最も露骨にあらわれた。それは人民の日常生活に必要でない一切の虚飾を焼却する儀式であって、焼かれた主なものは、琵琶・竖琴・骨牌・骸子や、婦人の装身具・化粧道具・面紗・髪鬘・香料、その他書籍・絵画の類であった。書籍のなかには、ローマ以来のもの、新しいものでは、ペトラルカやボッカチヨの作品が含まれていた。（ダンテの『神曲』はさすがに焚書をまぬかれた）

サヴォナローラの焚火は、メディチ家治下における芸術生活や享楽生活の追放にほかならなかった。このクーデターに対して、メディチ擁護派の反撥が起ってきたのは当然である。他の一方、サヴォナローラは、法王権擁護派の反抗運動に当面せざるを得なくなった。ローマ教会の改革を任としていたサヴォナローラは、さきにフランス王チャールス八世に勧告して、非道の法王アレクサンドル六世の廢位を迫り、さらにこの法王を抑圧するための宗教会議開催の必要を提議したほどである。

法王は大に怒って、サヴォナローラの言論を抑え、その政治力を無効ならしめるために、フロレンス内の反サヴォナローラ派と提携した。この危機において、サヴォナローラが、その保護者であるフランス王の死に遭遇したのは、実に致命的打撃であった。

当時のフロレンスには、イタリア諸国のおのおのがそうであったように、政党とはちがった意味の、朋党の争が展開されていた。大きくいえばゲルフ党（法王党）とギベリン党（皇帝党）、小さくいえばオルシニ党とコロナ党、白党と黒党、そうして現在ではサヴォナローラ党とメディチ党とにわかれていた。のみならず、サヴォナローラを戴くドミニコ党と法王を戴くフランチェスコ党とが、いまや鎬を削っていた。かくして、党争は一四九八年四月ドミニコ、フランチェス

コ両党の衝突から火蓋をきって拡大したが、その結果サヴォナローラは捕えられ、翌月焚刑に処せられた。サヴォナローラの人物月旦について、アームストロングは『ケンブリッジ近世史』第一巻『ルネサンス』の部に、

彼は練達の政治家でもなく、聡明な政治指導者でもなかったかも知れない。しかし、精神力において後世に永く影響した点で、彼に匹敵するものは甚だ少ない。

と記しているが、事実そのとおりである。サヴォナローラの精神力の根本は、純真にして強烈な信仰心であり、それが熾烈なカトリク改革の意欲に燃えあがったのである。それは数十年後イスパニヤにあらわれたロヨラの殉教精神と比較さるべきものである。

五 反宗教改革と再宗教改革

われわれは最後にサヴォナローラ以後に起ったカトリク改革を、ルターらの宗教改革に対する反宗教改革（反改革）の問題として、また宗教改革にあきたらないで、そのなかから起った新たなプロテスタント改革を、再宗教改革（再改革）の問題として、特にイタリヤに関するかぎりにおいて取り扱うことにする。

反改革が宗教改革に対する反動としてまずローマに起ったのは、宗教改革以前すでにダンテやサヴォナローラによる法

王叱咤の事実があったことからみて、けだし当然であろう。反改革は法王パウロ三世（一五三四～四九）の人格を中心として行われた。ローマ教会がその危機において、アレクサンドル六世と素行正反対のパウロ三世を迎えたのは幸福である。

パウロ三世はグレゴリー七世やユリウス二世ほどの大器ではなかった。しかし、枢機官カラファの画策を採用して、反宗教改革の実をあげることができた。（シモンズ著『イタリヤにおけるルネサンス』第八巻『カトリクの反動』参照）（ルカス著『ルネサンスと宗教改革』参照）シモンズによると、パウロ三世は「英雄でも天才でもなかった」けれども、カラファの手腕を利用し、宗教会議を巧みに運用して、反改革を実行した。反改革といっても、カトリク本来の在り方を改めたのではなく、教会の伝統は『聖書』とおなじくこれを尊重し、また天啓をみとめ、プロテスタント側から攻撃された七聖礼をあくまで堅持し、ルターらの「信仰による義」の解釈を非難した。しかし、売官や免罪符の悪風を廃止し、僧侶の素行を矯正した点に、自省自粛の精神を示している。またパウロ三世がロヨラの耶穌会をみとめて、その世界的宣伝による積極的運動を助成したのは、カトリク教発展のために、機宜を得たものである。従ってアームストロングが、パウロ三世登極の「一五三四年」に時代的意義をみとめ、これを「法王史における新時代の発端」とした（『ケンブリッジ近世史』第一巻参照）の

は、至当であると思う。

上述のように、イタリアは、宗教改革以前におけるサヴォナローラのカトリク改革によって、またその後における法王パウロ三世の反改革によって、特色を発揮した。それはイスパニヤの場合とおなじく、南欧ラテン系民族の熱情からほとばしり出た信仰心のあらわれであって、北欧ゲルマン民族の理智の成果であった宗教改革の場合とは、対蹠的であった。

ところが、南欧はかならずしもカトリクのみの世界ではなかった。そこには、宗教改革に対する反宗教改革以外の、宗教改革もしくは再宗教改革が企画されていた。が、われわれは説明の範囲を縮めて、再改革の問題だけを取り扱うことにする。

ルターやカルヴィンらの宗教改革に対する不満から、北欧では再改革が計画され、カールスタット（一四八〇〜一五四一）創始の再洗礼教（Anabaptism）がドイツに、パーカー（一五〇四〜七五）草創の清教（Puritanism）がイギリスに行われていた。しかし、私がここに取りあげるのは、イタリア人レリオ・ソチニ（一五二五〜六二）とその甥ファウスト・ソチニ（一五三九〜一六〇四）とによってはじめられた統一教（Unitarianism）である。

両ソチニによる統一教成立の陰には、イスパニヤの再改革者ヴァルデス（一五〇〇〜四四）の影響が、大いにあざかってきた。エラースムスのヒューマニズムに動かされていたヴァ

ルデスのイタリア渡来は、両ソチニの思想にキリスト教への人間的解釈を植えつけた。その結果、両ソチニは三位一体を信奉するカトリク教会を統一性の無視者として攻撃した。エホヴァ一神への信仰の統一をはかるために、彼らはそれまでの、キリストを純粹な神とし、もしくは神人両格者としたキリスト教諸派の見方を不合理として、断然キリストを「単なる人」（mere man）とした。キリスト自身が「人の子なり。」といていたのに、これを神とするのは、キリストの本意に背くものと考えたからである。「ムーア著『宗教史』第二巻参照」

両ソチニがキリストを「単なる人」としたのは、キリストの価値をおとすためではなく、むしろキリストに人間として選ばれた最上のものをみとめ、それだからこそ、神の思召にかなって、予言者にされたのだという風に解釈した結果にほかならない。それは多分、アラ一神を強調し、彼自身を単なる予言者としたマホメットの態度に類するもので、近世的合理主義の必然的あらわれであろうと考えられる。

ファウスト・ソチニの統一教の開設は、カトリク教の空気の濃厚なイタリアにおいては可能でなく、ポーランドにおいて実現された。が、いずれにしても、ソチニの再宗教改革が、サヴォナローラのカトリク改革とおなじく、ルネサンスイタリア人によってなされたことは、宗教改革史上注意すべき事項である。